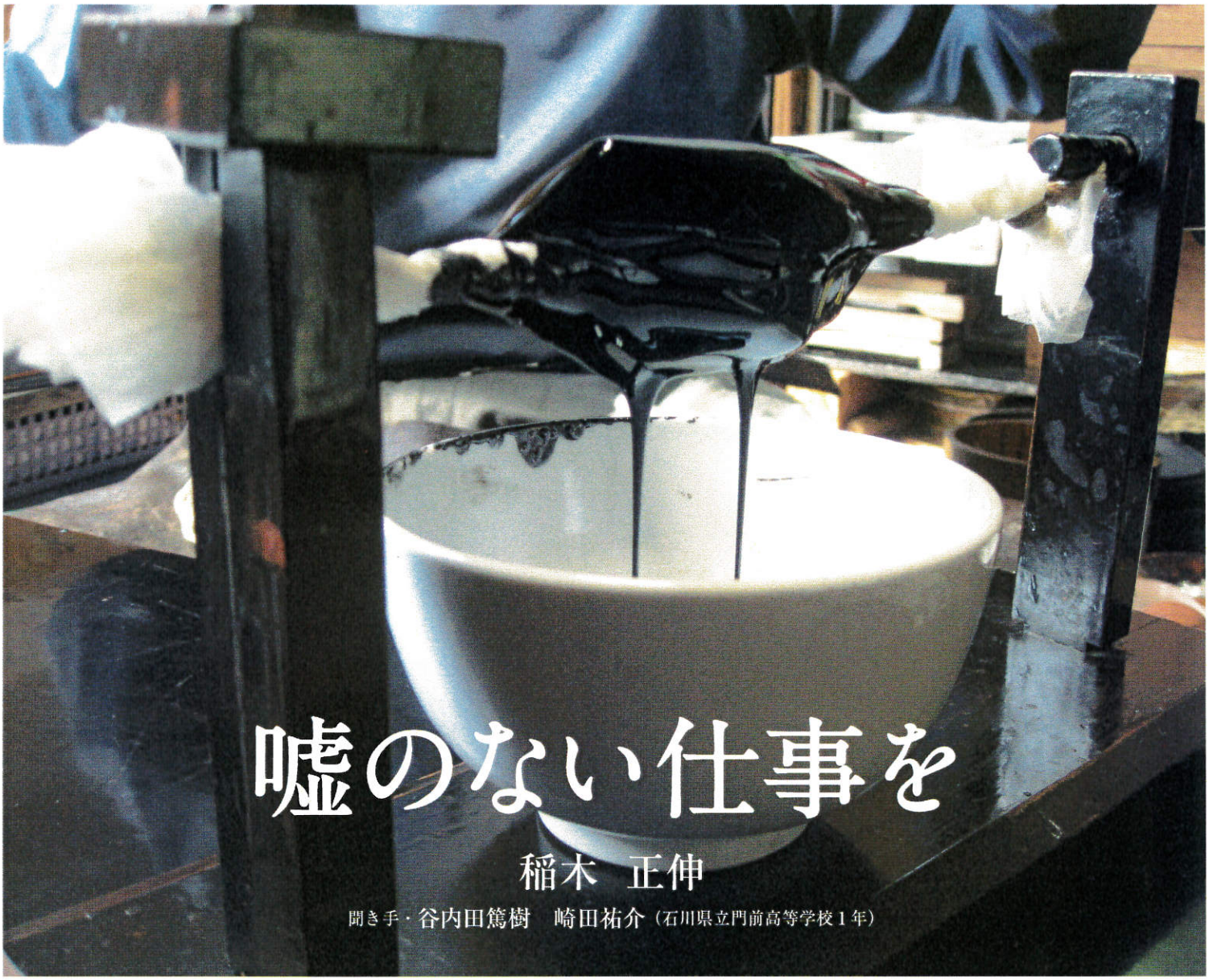


嘘のない仕事を

稲木　正伸

聞き手・谷内田篤樹　崎田祐介（石川県立門前高等学校１年）

漆を濾している様子

自己紹介

私の名前は稲木正伸です。生年月日は昭和14年の11月21日生まれで、輪島市鳳至町畠田に住んでいます。家族は俺と妻と長男次男おるけど、家には今んとこ俺と妻の二人。

私が輪島塗を始めたのは16歳からやね。中学校卒業した時は景気が悪うてどこにも仕事がなかったから塗師屋さんへ弟子に行くことが一番仕事に就く早道やったからなったね。それから今日までずっとしてる。

修業時代

修業を４年間して、礼奉公が半年。そんで一応年季明けて京都行き、滋賀行き、和歌山行き、名古屋行って仕事でお寺塗りに何年か回って歩いたね。

京都ではでっかい大仏さんを時代塗りしてきた。それから滋賀は、比叡山の下の園城寺（三井寺）さんの国宝の入っとる建物の中全部塗ってきた。和歌山は和歌山の金閣の新しく建てたのを丸塗りしてきてん。難しいがは無かったけど暑さには負けたね。高いとこ上がらなならんからちょっと体参ってしまったね。名古屋は輪島から８人で名古屋別院行ってでっかいお寺さんの全部塗ってきたげんね。

一番の楽しみ

今現在お陰様で業者の方が仕事持ってきてくれるんで仕事切れたこと１回もねえ。そのなかで一番楽しいがは、１週間に１回輪島高校行って総合学科の生徒さんに教えることやね。生徒さんと会話するがほんとに楽しい。生徒さんまじめやし、ほんとに一生懸命にする。

ところがなかなか輪島塗しようかって言う若い人居らんからちょっと残念やと思っとるげんけどね。輪島塗が栄えてきてくれればいいと思っとるけど。

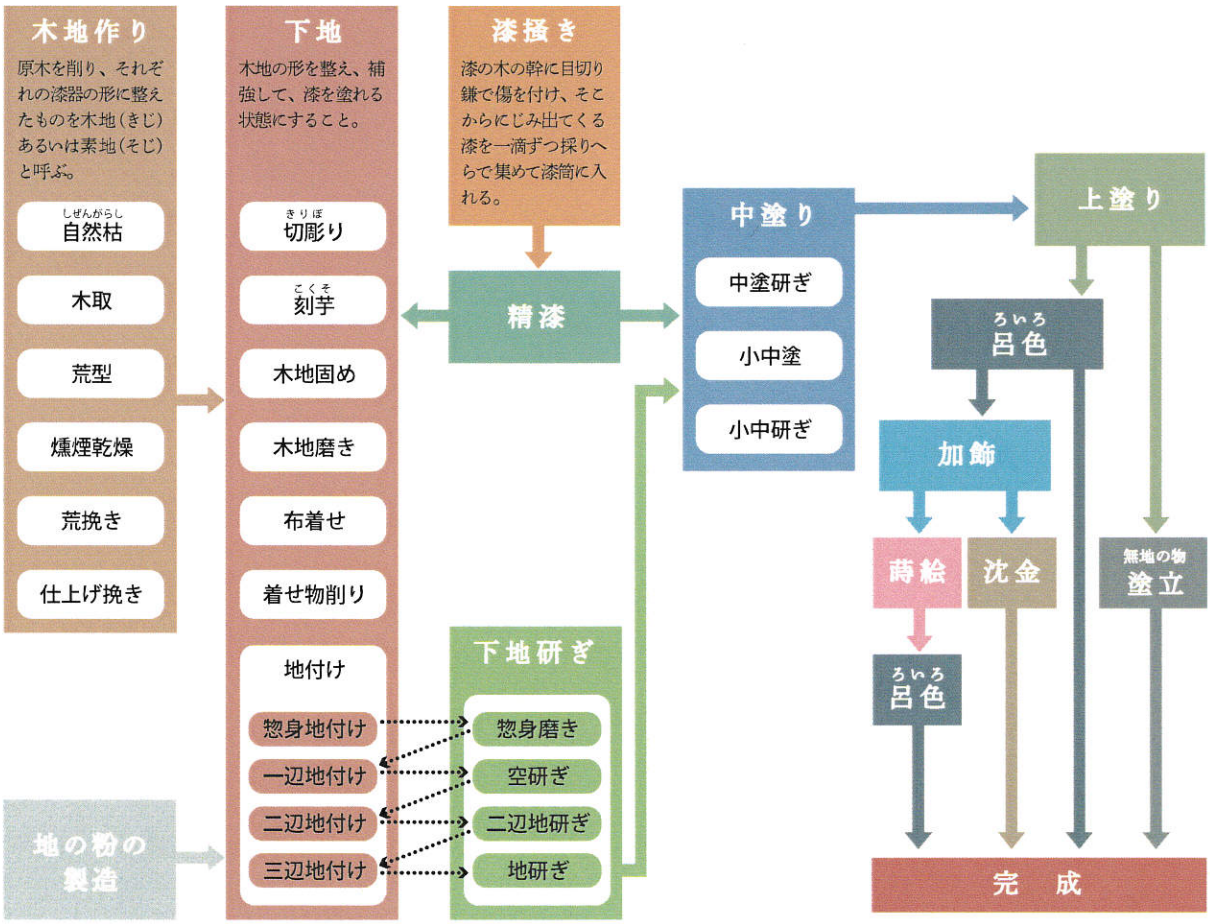
（上）中塗りしている様子　（下）作業中の稲木さん

輪島塗の工程

中塗り・上塗りっていう工程があるげんね。品物に塗る時にゴミかかりゃだめねん。そのホコリを取り除くことを「漆を濾(こ)す」って言うげんけど、和紙でそれをとっとる訳じゃ。ここに漆出してこの刷毛(はけ)洗う時は全部濾してしまうわけじゃ。湿度と温度はものすごい大事なもんでね。この中塗り・上塗りの。このストーブね、これを点けとかんと、塗る時に暖めんとだめねん。漆を乾燥させる時の湿度が75パーセントで、温度が28度くらいかな、そんで乾きにかかるんだけどね、大体そんなもんじゃねぇんかと思うげ。6月頃になるとね、湿度が80から90パーセントあるわね。そうするとね、今度は湿度を除湿器で落とさなならんげ。それが大変やけどね、それ見てはせな（温度と湿度を調整しないと）これは6月の梅雨の時に湿度が90、温度が30くらいから塗って、この部屋に入れると明日になったら漆が縮むげ。それを調整するのが人やね。それはきちんと見ていかなならんね。中塗り・上塗りは湿度温度に神経使うね、湿度があるとだめになるげ。漆はみんな生きとるって言うけど、本当に生きとると一緒やね。ちょっとでも間違うてしもうと、全部縮んでしもうげ。よう注意しては塗っていかならなんね。

ここに漆が付いたもんで、ここを拭かんとおくと、ドコドコドコと乾いた線が濁りになるもんで、全部拭いとるげ、美しく取ってしもわなならんげ。こうして取ってしもうたら、これと一緒に均等に塗って行くさかいね。この小さい刷毛で隅の漆を取らんかったら、縮んでしもうげ。ここと一緒にならんもんでね、塗るのは一緒な事するげ、そんで乾いたら次の日にここ塗るげ、ここからここまで1回塗る（表面を塗って、次の日、乾いたら裏面を塗る）。表を塗って乾かすのは8時間から10時間で乾くげんけどやっぱり24時間置いたほうが完全に乾いて次に塗れるげ。こうして中塗りは1工程

輪島塗の製造工程



(*1) 下地の工程では、漆と米糊と輪島地の粉（じのこ）を配合したものを使う。輪島地の粉とは、輪島市内小蜂山から産する珪藻土の一種の黄土を蒸し焼きにし粉砕した粉末のこと。この地の粉と米糊をまぜた漆を地漆（じうるし）と呼び、一辺地漆、二辺地漆、三辺地漆と進むごとに地の粉の粒子が徐々に細かくなる。
(*2) 桧皮(ひわだ)　ヒノキの樹皮を叩きほぐして刷毛状にしたものを桧皮へらという。破損しやすいところに桧皮へらで生漆を塗り、補強する。
（出典：石川新情報書府　http://shofu.pref.ishikawa.jp/shofu/wajima/main.html）

終わりやね。

工程の大切さ

ただ塗り重ねればいいんがじゃないんやわ。一番大事なんは、「腹合わせ」って言って、糊が1杯やったら漆は1杯のりよりちょっと余計に。グラムにしたら糊が100グラムやったら、漆は120グラム、それを一辺地、二辺地、三辺地と、これ全部一緒にしていく事(*1)。これが、一番輪島塗の良いとこでないかと俺は思うね。それと面を木漆で固めていく桧皮(*2)。全国で塗り物あるけど、これ使うとるが輪島だけ。輪島塗のお椀が欠けんがは、桧皮でまるめるもんで欠けんが。輪島塗は桧皮と漆の調合を全部一緒にすることが良いとこじゃないかと俺は思うげん。

後継者について

これだけは一番難しいげん。今は最低賃金法が国で決められてん。どんな人でも入ったら最低賃金法で十何万かやらなならんげ。昨日まで学校行っとったなんも出来ん子供に親方さんが銭立てするがちょっと難しいと思うげん。だから若い衆いらんか聞いたらいらんて言うがと俺は思うげん。

輪島塗に対する思い

もともと輪島塗は装飾じゃねぇ。お椀やとかお盆やとか道具や。飾りもんは昭和36年の時、輪島塗のパネルの額皿ができてん。

そんな輪島塗やけど、今は扱いにくいんかねぇ。それでも買うてくれる人、使ってくれる人のために、職人としてきちんとした嘘のない仕事をしていきてぇなあと思って今までしてきたげん。嘘のない仕事をするのは難しいもんやけど、それでも負けたらだめやって気持ちを持ってやらないかんわいね。伝統を守るいうても、その人の根性があるわいね。

例えば10工程ある作業を7工程にしたり、6工程にしたりせんと合わんげったら、はじめから合わんということをはっきり言える職人にならなだめやと俺は思う。

【取材日：2015年10月18日、12月6日】

PROFILE

稲木　正伸 いなぎ　まさのぶ

昭和14年11月21日　年齢：76歳
輪島塗師

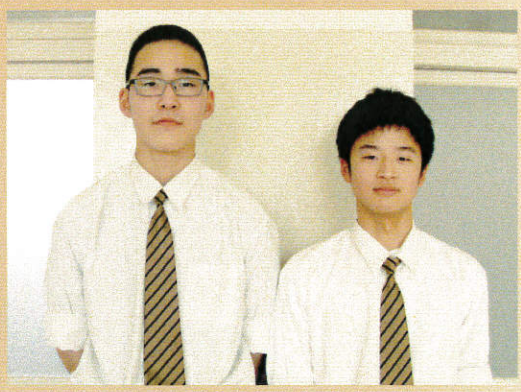
輪島中学校を卒業後、昭和30年に市内の漆器製造販売店に弟子入り。年季明け後、京都、滋賀、和歌山、名古屋等で寺院や仏具など寺塗を経験する。輪島に戻ってからは、市内の漆器製造販売店の製品作りで下地塗、研ぎ物、中塗り、上塗り等の工程を担当する。平成27年NHK連続テレビ小説「まれ」で輪島塗に係わる俳優の技術指導を行った。

● 取材を終えての感想 ●

僕は初めて聞き書きに参加しました。最初は緊張と不安でいっぱいでした。しかし、取材に行った稲木さんはとても優しくて、詳しくお話を聞かせてもらうことができました。稲木さんのお話を聞いていると、輪島塗の凄さが改めて感じました。輪島塗は湿度や温度が関係する厳しい環境の中で作られるもので、その厳しい環境のなかでも、伝統工芸を立派に作れる人こそが、本当の職人だと僕は思います。お話して下さった稲木さんご夫妻をはじめ、先生方、支えて下さった皆さん、本当にありがとうございました。このような経験を今後も活用したいと思います。

（谷内田篤樹　写真：右）

自分は元々文章を作ったりまとめたりするのが苦手なので、最後までできるか不安だったけど、きちんと完成させることができたのでよかったです。2回目の取材の前日に体調を崩してしまって相方にも迷惑をかけてしまって本当に感謝してます。

今回の「聞き書き」研修で、普段触れることのないことを知ったり、体験することができました。輪島塗などの伝統工芸は好きだったのですごく楽しかったです。今回の体験を様々な面で活かしていきたいです。

（崎田祐介　写真：左）